

カンボジア教員養成大学との協働による 大学と附属学校の連携のあり方に関する研究

研究代表者 木下 博義（教職開発）
研究分担者 丸山 恭司（教育学）
桑山 尚司（グローバル教育）
渡辺 健次（技術・情報教育学）
草原 和博（社会認識教育学）
永田 良太（日本語教育学）
松浦 武人（教職開発）
杉原 満治（教職開発）
岡村美由規（教職開発）

I 研究の背景と目的

カンボジアでは、これまで小・中学校の教員は教員養成校（Provincial Teacher Training College; PTTC, Regional Teacher Training Center; RTTC）の2年課程で養成してきた（間々田・中村，2018）。しかし、カンボジア政府は教員の質向上を目指し、4年課程の教員養成大学（Teacher Education College; TEC）の設置と、そのために必要な技術協力を日本政府に求めた（Ministry of Education, Youth and Sport; MoEYS, 2014）。これらの要請を受けて、独立行政法人国際協力機構（JICA）は、「カンボジア国教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト（E-TEC プロジェクト）」（2017-2022 年度）を立ち上げ、筆者らの多くがプロジェクトに携わった。

具体的には、学長・副学長などの管理職を対象とした職能開発マネジメントの支援、TEC 教員を対象とした授業力・研究力向上の支援を行った。とりわけ後者については、アクション・リサーチを基軸として、量的研究や質的研究の方法、収集したデータの分析方法、研究成果の整理や公表の方法などについて、講義や演習を取り入れながら支援した。さらに、プノンペンとバタンバンに教員養成大学（P-TEC, B-TEC）が設立された後も、継続的に支援を行い、一定の成果をあげた。例えば、TEC 教員は教科グループでアクション・リサーチを行い、大学の研究紀要に論文を投稿したり、国際学会で発表したりするまでになった。

しかしながら、E-TEC プロジェクトを通じて TEC 教員が得た学びは教科グループ内・個人内に留まっており、組織的に TEC 附属学校に広めたり、両者の協働的な教員養成に活かしたりするには至っていないようである。TEC 教員にとって、附属学校は学生の教育実習の場であるという認識が強く、大学と附属学校の連携という点で課題が見られる。教員の質向上という本来の目的に照らせば、TEC 教員がアクション・リサーチの研修を通して身に付けた新たな知見をもとにして、指導的な立場で附属学校と連携することは重要な役割であると考えられる。そこで、附属学校と大学との連携に実績のある広島大学と TEC が共同して研究を進めることにより、新たな方向性を見いだすことができると考えた。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、TEC と協働し、これからの教員養成に向けた大学と附属学校との連携のあり方を検討するとともに、具体的な方略を提案することを目的とする。

(丸山恭司・桑山尚司*・草原和博・木下博義*)

Ⅱ 研究の計画と方法

1. 研究の全体計画

本研究では、明らかにする学術的な問いとして、①「TEC と TEC 附属学校の連携の現状と課題は何か」、②「これからの教員養成に向け、大学と附属学校はどのように連携すべきか」を設定した。まず、①については、TEC と TEC 附属学校を訪問し、各校教員へのインタビューや授業観察などを行い、それらをもとに TEC 側と議論することによって明らかにする。②については、TEC 教員と TEC 附属学校教員を広島大学、広島大学附属学校に招き、議論や授業観察などを行い、大学と附属学校の連携のあり方を検討する。例えば、研修会の内容や方法、アクション・リサーチの実施などのように、具体的な連携について検討する。本研究は、TEC に対する支援の側面のみならず、広島大学の取組を分析することにより、大学と附属学校の連携に関して一層の深化・充実を図るという側面も併せもっている。

以上のような全体計画のうち、本年度は P-TEC（以下、P-TEC を TEC と記す）の附属学校を訪問し、教員へのインタビューや授業観察を行った。このため、未着手の調査は次年度以降に実施することにし、本稿では本年度に行った調査についてのみ報告する。

2. 本年度の研究と方法

本年度は、11 月に TEC の附属小学校および附属中学校（両校とも TEC に隣接）を訪問し、本研究の説明をしたうえで協力の得られた教員（管理職を含む）を対象に、インタビュー調査を行った。附属小学校では、副校長 1 名、第 1 学年～第 6 学年を担当している教員 11 名に対し、インタビュー調査を行った。同様に、附属中学校では、校長 1 名、副校長 1 名、教科リーダーを担当している教員 8 名に対し、インタビュー調査を行った。なお、調査内容や方法については、広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査委員会から承認を得た（承認番号：HR-ES-001210）。実際のインタビューに際しては、「結果は、個人を特定することなく分析・処理し、研究以外の目的には用いないので、思ったことをありのままに教えてください」という説明を行った。調査の詳細を以下に示す。

【TEC 附属小学校】

（調査対象）副校長 1 名、1 年生担任 2 名、2 年生担任 2 名、3 年生担任 2 名、4 年生担任 1 名、5 年生担任 2 名、6 年生担任 2 名 計 12 名

* 2 年生担任 2 名のうち 1 名は、TEC の卒業生（一期生）であり、附属小学校で教育実習を経験した教員であった。

（調査内容）研修会や教育実習などにおける TEC と附属小学校との連携の実態、今後 TEC とどのような連携をしたいかなどについて質問した。

（調査方法）低学年担任教員 6 名、高学年担任 5 名のグループに分かれ、それぞれ約 1 時

間のインタビューを行った。その後、担任教員からの聞き取り内容も踏まえて、副校長に約 30 分間のインタビューを行った。筆者のうち 3 名がインタビューし、クメール語の通訳者 1 名が逐次通訳した。インタビューの内容は、ボイスレコーダーとノートに記録し、調査終了後に整理した。

【TEC 附属中学校】

(調査対象) 校長 1 名、副校長 1 名、数学 1 名、物理 1 名、生物 1 名、ICT 1 名、クメール語 1 名、英語 1 名、地理歴史 1 名、体育 1 名 計 10 名

(調査内容) 研修会や教育実習などにおける TEC と附属中学校との連携の実態、今後 TEC とどのような連携をしたいかなどについて質問した。

(調査方法) 理系教科 4 名、文系教科 4 名のグループに分かれ、それぞれ約 1 時間のインタビューを行った。その後、各教科教員の聞き取り内容も踏まえて、校長、副校長に約 30 分間のインタビューを行った。

(丸山恭司・桑山尚司*・渡辺健次*・木下博義*)

Ⅲ 研究の結果

1. TEC 附属小学校教員へのインタビュー結果

まず、低学年を担当している 6 名の教員へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表 1 に示す。

表 1 低学年担任教員へのインタビュー結果（抜粋）

【主に研修に関する連携】
アメリカの支援を受けて、低学年のクメール語と算数については研修会があるため、 <u>TEC 教員と話を</u> <u>する。TEC へ行って、そこで研修をしている。</u>
クメール語と算数の研修には、1 年生と 2 年生の担任が全員参加している。3 年生を対象としたプロジェクトは終了したため、3 年生の担任は研修に参加していないが、今後は 3 年生もサポートする見通しになっている。そのため、 <u>TEC とよい形の連携ができつつあると思う。</u>
以前は、小学校での指導の仕方などについて研修を行っていたが、 <u>コロナになってから研修そのものがなくなった。</u>
海外からの支援による交流を除くと、 <u>TEC 教員とはほぼ連携をしていない。TEC との連携があると、自分たちは嬉しい。</u>
自分たちのようなベテランは、 <u>TEC 教員と連携しにくい。</u> 若い先生方は連携しやすいと思う。もし管理職から指示があれば連携するが、そうでなければ自分からは動かない。
<u>TEC 教員と一緒にやるワークショップがあると嬉しい。</u> ただし、これまでは日曜日にワークショップがあったので、それはやめてもらいたい。半日は私立学校でも教えているので、その時間は確保したい。でも、全員に参加してほしいので、 <u>同じワークショップを午前と午後に 2 回やってもらえると嬉しい。</u>
普段ここでやっている研修会に TEC 教員が参加することについては、私たちが「評価」しに来るなら希望しない。しかし、 <u>TEC 教員から新しい知識を教えられるなら嬉しい。</u> 日本からの支援もほしい。日本の子供の状況を知りたいし、日本でどんな授業をしているのか知りたい。

【主に教育実習に関する連携】
学生が実習をしている期間、TEC 教員が授業観察に来ることはある。
TEC の学生が実習するときは、私たちは授業観察をしてコメントする。TEC の指導案も私たちの指導案とほぼ同じ形式なので、指導上大きな問題はない。しかし、TEC の学生は、実習中に新しい指導法を行うと聞いた。特に、ICT や英語などについては、実習生の方がよく知っているので指導に支障がある。子供の理解についても実習生はよく勉強しているが、子供の実態は私たちの方が詳しいので、実習生に対してコメントできる。
(TEC 卒業生) 1 年生と 2 年生は海外からの支援があるので、 <u>TEC 教員の協力を得ている</u> 。例えば、 <u>実習生の授業を観察して、TEC 教員がコメントしたりしている</u> 。自分は、 <u>大学時代の指導教員とやり取りをしている</u> 。指導教員は、自分の個人的な質問にも対応してくれる。理科、数学、クメール語のレッスンスタディのグループがあり、自分は数学グループに入っている。 <u>自分の他にも TEC の卒業生が 5 人いる。その 5 人は TEC 教員とつながりがある。</u>

下線：連携あり、波線：連携なし、二重線：希望

表 1 に示した内容には、附属学校教員と TEC 教員が連携している実態、連携が困難な実態、今後の連携への希望や期待に関するものが見られる。1 年生・2 年生の担任については、クメール語と算数の研修を TEC 教員と一緒にに行っている現状があり、今後は連携の範囲を 3 年生まで広げ、よりよい関係を構築することが予想される。とりわけ、TEC 卒業生の場合は、日常的に TEC 教員とやり取りができる関係にあり、5 人の卒業生が連携の核として重要な役割を果たすのではないかと考えられる。また、ミドルからベテラン教員の場合は、TEC と共同でワークショップを開き、TEC 教員から指導法などに関する新しい知識を学びたいという希望があった。一方で、自分たちが評価されることを嫌がり、それを避けようとする傾向も見受けられた。

続いて、高学年を担当している 5 名の教員へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表 2 に示す。

表 2 高学年担任教員へのインタビュー結果（抜粋）

【主に研修に関する連携】
<u>TEC 教員と附属学校教員の連携は、ほとんどない。</u> すべての情報は管理職がやり取りしているので、自分たちは知らない。
<u>TEC との連携はほとんどない。TEC の新しい知識をほとんど共有してもらっていない。</u> だから、自分たちは新しい指導ではなく、従来のままの指導をしている。
連携がないわけではない。しかし、ICT の研修をしても <u>自分たちは使いこなせない</u> ので、 <u>TEC で教えてほしい。</u>
低学年は、TEC のワークショップに参加したことがあると思うが、 <u>自分たちは参加したことがない。</u> 校内の研修会（テクニカルミーティング、月に一回）は行っており、年に 2 回の授業研究をしている。ここに <u>TEC 教員が加わって、一緒に研究できると嬉しい。</u>
大事なことは、 <u>私たちに研修を行ってほしい（新しい教え方、指導案の書き方など）</u> 。特に、理科、算数、クメール語、社会科の指導の仕方のモデルを教えてほしい。 <u>その研修のあとに、授業研究ができ</u>

<p><u>たら嬉しい。</u>しかし、TEC 教員に自分たちを評価してほしくはない。</p>
<p>TEC での研修があるとより忙しくなるが、<u>それでも研修があるなら参加したい。</u>平日は忙しいので、長期休暇のときに研修があると嬉しい。日本からのワークショップ支援があったら、参加したい。</p>
<p>自分が（半日）教えている私立学校とは長期休暇の時期が違うので、ワークショップがあっても参加できない。日本からのワークショップ支援があったら参加したい。</p>
<p>【主に教育実習に関する連携】</p>
<p>少しは連携があるが、<u>TEC と附属学校の教員同士の関わりはほぼない。</u>実習についてはやり取りがある。自分たちが TEC へ行行って、実習生の指導について相談をする。</p>
<p>自分たちは伝統的な指導をしている。実習生が来ると、新しい考えを持っているので、指導しにくい部分もある。だから、<u>TEC 教員に新しい指導法などを教えてもらいたい。</u></p>
<p>実習生を受け入れる前に TEC と会議を行うが、その内容は実習のルールに関することだけである。実習生を受け入れた際、教え方のギャップがあるので指導しにくい。だから、実習のルールだけの会議ではなく、<u>TEC の先生に新しい指導法などを教えてもらいたい。</u></p>
<p>指導案の形式は、学生も自分たちもほぼ同じため、指導する際に問題は感じない。また、授業へのコメントについても問題は感じないが、TEC からみるとベテラン教員の授業は伝統的な授業という指摘がある。</p>

下線：連携あり，波線：連携なし，二重線：希望

表 1 と同様に、表 2 に示した内容にも、附属学校教員と TEC 教員との連携の実態や、今後の連携への希望・期待に関するものが見られる。低学年担任教員との大きな違いは、実習に関する事前会議を除いて、現状では TEC 教員との連携がない点である。その要因としては、外国の支援による研修会がないことや、TEC 卒業生がいないことなどが考えられる。しかし、実習生に対する指導とも関連して、「新しい指導法を教えてもらいたい」「新しい考え方、指導案の書き方についての研修をしてほしい」のように、TEC への要望があることが伺える。このことは、E-TEC プロジェクト終了後の課題であり、TEC 教員がアクション・リサーチの研修を通して身に付けた新たな知見を附属学校教員に共有する必要性を示しているといえる。

最後に、副校長 2 名へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表 3 に示す。

表 3 副校長へのインタビュー結果（抜粋）

<p>管理職としては、<u>TEC 側から声をかけてほしい。</u>木曜日のテクニカルミーティングに、附属学校教員も呼んでほしい。そうすることで親しく感じるし、連携もしやすくなる。<u>ここ 1 年くらい、TEC と関わりがない。</u></p>
<p>直前ではなく、一週間くらい前には様々な情報を共有してもらいたい。TEC からの連絡が遅いので、附属学校での対応がしにくい。</p>
<p>附属学校の先生方は、新しい教え方をあまり知らない。だから、<u>TEC で研修をしてほしい。</u>そうすると、<u>実習も指導しやすくなる。</u>1 年生と 2 年生はアメリカの支援があるのでよいが、それ以外の学年は問題があると考えている。<u>研修をしてほしい。</u>このインタビュー結果をぜひ TEC に伝えてほしい。</p>

そうすると、TEC と附属学校が連携するきっかけになり、自分たちの仕事もうまく進むと思う。

下線：連携あり，波線：連携なし，二重線：希望

表 3 に示した副校長へのインタビューからも、TEC との日常的で円滑な連携を希望していることは明らかである。附属学校教員の授業改善のためには、TEC 教員による支援が欠かせないというのが、その理由の一つであると考えられる。インタビューの最後に語られた「このインタビュー結果をぜひ TEC に伝えてほしい」というコメントは、切実な思いを表している。

2. TEC 附属中学校教員へのインタビュー結果

まず、理系教科を担当している 4 名の教科リーダー教員へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表 4 に示す。

表 4 理系教科担当教員へのインタビュー結果（抜粋）

【主に研修に関する連携】
<u>TEC 教員が附属学校教員の研修をしている。附属学校教員も、自分たちに関係する研修であれば、TEC で開かれる研修会に参加している。シンガポールの支援でカリキュラムの研修会があったので、参加した。</u>
日本の NPO が新しいレッスンスタディの研修会をやっており、それに <u>TEC 教員・附属学校教員とも参加している。</u>
教育省主催のレッスンスタディの研修会に参加した。TEC は毎週木曜日に研修会をしているが、 <u>TEC の研修会に参加したことはない。</u>
毎月一回、テクニカルミーティングを行っている。グループワークで、自分の課題について話し合っている。また、他の研修会で学んだことをテクニカルミーティングで共有している。しかし、 <u>TEC 教員がテクニカルミーティングに来て、自分たちに対して指導することはない。</u>
【主に教育実習に関する連携】
実習の前には、 <u>TEC 教員と附属学校教員が合同で会議を行い、打ち合わせをしている。教科ごとに打ち合わせをし、研究授業の時は TEC 教員が実習生の授業を観察して指導のコメントをしている。</u>
<u>TEC 教員と附属学校教員が協力して、実習生の指導をしている。</u>
【主に共同研究に関する連携】
<u>TEC 教員との共同研究はない。TEC の授業研究グループは、附属中学校の授業を研究対象にしている。</u>
<u>TEC 教員との共同研究はない。時間的にゆとりはないが、共同研究はしてみたい。</u>
TEC 側から共同研究の依頼があったら興味はあるが、時間がない（一週間のうち、3 日は別の学校で働いている）。
<u>これまでに TEC 教員から授業を見せてほしいと言われたことはないが、模擬授業もしているので依頼があれば見せてもよい。月に一回くらいであれば可能である。</u>
自分の研究については、TEC 卒業生に数学の模擬授業をしてもらい、新しい知識を得ている。自分の研究について、TEC 教員に直接相談するというよりは、実習生を通して相談している。

下線：連携あり，波線：連携なし，二重線：希望

表4に示した内容には、研修や教育実習、共同研究における附属学校教員とTEC教員の連携の実態、今後の連携への希望や期待に関するものが見られる。例えば、研修については、附属学校教員とTEC教員がともに研修を受けたり、TEC教員が指導的な役割を果たしていたりする教科が見られた。その一方で、連携のない教科も見られた。教育実習に関しては、事前の打ち合わせから実習期間中の指導に至るまで、附属学校教員とTEC教員が協力して行っていた。最後に、共同研究については、これまでに連携の実態がないことが浮き彫りになった。附属学校教員からは、「TEC教員と共同研究する時間がない」という意見が多くあがったが、実習生を通して自分の研究について相談している状況もあり、研究のための時間や場所・機会をつくる工夫をすることによって、連携の実現に向けた糸口がみつかるのではないかと考えられる。

続いて、文系教科を担当している4名の教科リーダー教員へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表5に示す。

表5 文系教科担当教員へのインタビュー結果（抜粋）

【主に研修に関する連携】
（3年生担当のため）普段、 <u>TEC教員と連携することはほぼない。</u> TECの施設を使うことはできる。
<u>1年生と2年生の担当は、TEC教員と連携している。</u> 学生がTECで学んだ新しい知識や指導法などを教科内で共有している。
<u>木曜日のテクニカルミーティングにTEC教員も参加してほしい。自分の教え方を改善したいので、TEC教員にも参加してほしい。</u>
<u>TEC教員は新しい指導法などを知っているのので、共有してほしい。</u>
<u>TEC教員にも研修会に参加してもらい、自分たちと意見交換をしてほしい。レッスンスタディの研修会をしたい。</u>
<u>新しい知識を吸収したいので、TEC教員に研修会に参加してもらいたい。</u> 自分の教え方が改善する。
【主に教育実習に関する連携】
実習の内容や指導案にコメントするなど、TEC教員と一緒に実習生を指導している（互いに50%ずつ関わっている）。
【主に共同研究に関する連携】
アクション・リサーチという言葉は聞いたことがあるが、あまり意味はわからない。自分の授業を改善できると嬉しい。
自分たちは、教職経験は十分にあるが慣れてしまっているのので、 <u>第三者に授業を見てもらって、コメントをもらいたい。</u>
今後、TEC教員と一層連携を強めていくなれば、 <u>連携の目的を明確にしてもらいたい。</u> 以前、広島大学と連携したが、勉強になった。
<u>TEC教員は新しい知見を持っているので、共同研究をしたい。</u> 例えば、今の生徒は3年生でも英語の学力が高くないので、 <u>このような課題をTEC教員と一緒に考えられたらよいと思う。</u>

下線：連携あり、波線：連携なし、二重線：希望

表4と同様に、表5に示した内容にも、附属学校教員とTEC教員との連携の実態や、今

後の連携への希望・期待に関するものが見られる。研修に関する連携については、学年によって異なる傾向があり、これまで連携実績のない学年もあった。しかし、回答した4名全員が、TEC 教員が研修会へ参加することを希望しており、自身の授業改善に対する積極的な姿勢が伺える。さらに、今後の TEC との共同研究についても、「自分の授業を改善できると嬉しい」「課題を TEC 教員と一緒に考えられたらよい」のような意見があり、関心・意欲の高さが伺える。また、理系担当教員の場合とは異なり、時間的な制約についての意見はあがらなかった。

最後に、校長1名・副校長1名へのインタビューでは、次のような回答が得られた。主な内容を表6に示す。

表6 校長・副校長へのインタビュー結果（抜粋）

教科によって、TEC との連携の仕方に違いがある。例えば、 <u>理科は連携できているが、社会科は連携できていない。</u> しかし、理科は連携が強いことによって、忙しくなって不満も出ている。社会科は教員数が少ないため忙しく、TEC と連携できないが、それによって授業改善もできないので不満が出ている。
TEC は、附属学校をモデル校にしたいと考えているはずなので、 <u>すべての教科に対して指導法の研修をしてほしい。</u> 今は教師中心の授業になっているので、先生方に新しい指導法を学んでもらいたい。
TEC 卒業生（一期生）のうち12名を採用しており、 <u>この先生方は TEC と連携している。</u>
一期生に続いて二期生も採用予定であるが、理数ばかり12名となっている。 <u>連携のことも考えると、教科のバランスを考慮して採用してほしい。</u>
TEC 教員から附属学校への研究協力の依頼があった場合、 <u>先生方の授業改善につながるので受け入れたい。</u> このことは、 <u>TEC の管理職にもお願いをしている。</u>

下線：連携あり、波線：連携なし、二重線：希望

表6に示した校長・副校長へのインタビューから、研修や研究で TEC と連携し、教員の授業改善を図りたいという考えが伺える。すでに TEC と連携している教科と、今後の連携を希望している教科があるという実態を踏まえ、TEC の管理職に連携の要望をしていることが明らかになった。また、TEC 卒業生が連携の鍵となるという認識のもと、採用の教科バランスについても要望をあげていた。

3. まとめ

TEC 附属小学校と附属中学校の教員に対し、主に①研修、②教育実習、③研究に関する TEC との連携についてインタビューを行った結果、次のことが明らかになった。まず、①研修では、附属小学校の低学年担任教員と附属中学校の理系教科担当教員の一部、そして TEC 卒業生については TEC 教員と連携しているものの、その他の教員はほぼ連携していなかった。このように両者の連携が希薄な要因の一つとして、外国の支援による合同研修会を除けば、教員らが自主的に計画・実施するような合同研修会がないことが考えられる。しかしながら、校種や年齢に関わらず、ほとんどの附属学校教員が今後の TEC との連携を希望していた。そしてその多くが、TEC との連携を通して自身の授業改善をしたいという希望を持っており、授業を変えることに対する強い意欲が見られた。

次に、②教育実習では、どの校種、学年、教科でも、附属学校教員と TEC 教員が比較的連携していた。この点については、教育実習は両者を結びつける共通の教育活動であることを示しているといえる。しかし、教育実習の事前会議におけるルール確認に留まっている学年や教科もあり、実習生の指導のあり方や指導法、教材の吟味などを通して一層連携を深めたいという希望が多くあがっていた。

最後に、③研究では、TEC の授業研究グループが附属中学校の授業を研究対象にしたという事例があったものの、それ以外に両者の連携は見られなかった。TEC と附属学校は同じ敷地内にありながら、両者の間に介在する問題として、主体的な働きかけの欠如が考えられる。校種や年齢に関係なく、ほとんどの附属学校教員が「TEC 教員は新しい知識を持っているので、共同研究したい」「自分の授業改善につながるので、共同研究の依頼があったら受け入れたい」と希望しているにもかかわらず、共同研究が実現しないのは、双方の働きかけがないことによると考えられる。附属小学校、附属中学校の管理職も、①から③について TEC との連携に対して前向きでありながら停滞したままの状態が続いており、両者の有機的な連携を実現するための組織と組織の関係構築が急務であるといえる。

(丸山恭司・桑山尚司*・渡辺健次*・草原和博・永田良太・
松浦武人・杉原満治・岡村美由規・木下博義*)

IV 研究の成果と今後の課題

本研究の成果としては、TEC 附属小学校と附属中学校を訪問し、TEC と TEC 附属学校の連携の現状と課題を明らかにしたことである。具体的には、①研修、②教育実習、③研究という 3 つの観点で分析した結果、両校とも類似した傾向があり、一部の学年や教科を除くと、これまでほとんど連携実績がないことがわかった。その一方で、これからの TEC との連携については、両校ともに多くの教員が希望しており、TEC との連携を通して自身の授業改善をしたいと考えていることもわかった。さらに、TEC との連携を速やかに開始するうえで、附属学校に勤務している TEC 卒業生が鍵となることが示唆された。

今後の課題としては、次の 2 点があげられる。まず 1 点目は、今回の調査は TEC 附属学校の教員のみへのインタビューとなったため、TEC 教員に対しても同様の調査を行う必要がある。さらに、今回は見送った B-TEC についても調査を行う必要がある。次に 2 点目は、今回の調査は現地調査のみに留まったため、広島大学と広島大学附属学校での本邦調査を行う必要がある。これらについては、次年度以降、継続して研究を進める予定である。

(丸山恭司*・桑山尚司・渡辺健次・草原和博*・永田良太*・
松浦武人*・杉原満治*・岡村美由規*・木下博義*)

引用文献

間々田和彦・中村琢 (2018) 「カンボジア王国の教員養成研修の課題」『日本科学教育学会
年会論文集』42 (0), 327-328.

Ministry of Education, Youth and Sports; MoEYS (2014)

https://www.globalpartnership.org/sites/default/files/2015_02_cambodia_education_sector_plan.pdf